

青森県臨床工学技士会会報へ投稿した内容です。それぞれの部署に読み替えて、ご一読いただければありがたい。

## 働き方改革を勤務環境改善の触媒に

～より一層働きやすい医療機関を目指して～

十和田市立中央病院 事業管理者 丹野弘晃

伝統ある青森県臨床工学技士会会報への執筆依頼をいただき、大変光栄に存じます。会長の後藤武様、担当のウルトラマラソン仲間である真苧坪克彦君に深謝いたします。いただいたテーマは、「医師の働き方改革、タスク・シフト/シェアで業務範囲が追加される臨床工学技士に期待すること」とのことでしたので、私なりの考えを述べたいと思います。

そもそも、あなたはなぜ働くのですか？と問われたら、どう返答するでしょうか。「生活のため、生きるためだよ。」「この仕事好きだから。」「人のためになっていると思うから。」などが、脳裏を横切ったかもしれません。労働の三要素と言われているのが、①生計の維持、②自己実現（個性の発揮）、③他者貢献（社会貢献）とのことなので、例として挙げた答えがそのまま当てはまるようです。一説には、③に関連して「はた（傍）をらく（楽）にすること」と説明されることもあって、納得しやすい解釈だと思います。さて、労働と強く関連する経済学という学問が確立されたのは、1776年に出版されたアダム・スミスの「国富論（原題：諸国民の富）」によって体系化されたので、比較的若く、250年ほどしか経っていないようです。当時の英国は、貿易によって国富の増大を目指す重商主義に価値を置いていました。このような時代を背景に、スミスは諸国民の富という原題の通り、富とは何か、何が国民にとって富にあたるのかについて述べています。この中で、貴金属こそが富だと考える重商主義を批判し、富の源泉は人間の労働であるという「労働価値説」を唱えました。つまり、人間の労働が価値を生み、労働が商品の価値を決めるという基本的な考え方です。その後も経済学は、哲学や倫理学も絡めて展開されてきています。そして、ここに来て貧富の格差問題の顕在化とそれに伴う分断や経済学は人々を幸せにする学問なのかとの問いもあり、経済思想という分野も重要視されていると思います。そもそも医療は経済学とは馴染みにくく、社会的共通資本に位置付けられてはいますが、コロナ禍も強く影響している時代背景の中で、「はたらくこと」の原点から働き方改革を考えてみるのも一視点かなと思います。

さて、「医師の働き方改革」についてですが、医師も労働者ということが明示され、時間外労働の上限規制も定まり、そのタイムスケジュールも示されました。各医療機関が諸々の工夫をしながら粛々と進めることとなりますが、「医師の」と銘打ってはいるものの、これを契機に職場の勤務環境改善に繋がなさい、とのメッセージも入っていると前向きに捉えるべきだと思います。このある意味外圧を、より一層働きやすい医療機関へ進化する・変化するチャンスとしたいものです。ただ一般的には、組織は変わりにくいもので変革しにくいものと考えられており、特に病院は変化を嫌う組織とされています。確かに、診療科の壁や職種の壁はかなり取り除かれつつあるものの、まだ存在しているとの実感はあります。加えて、変革には、内部事情とも言える組織文化（空気感のようなもの）も大変重要であると言われています。今のままで問題ないでしょ、面倒くさい、（かなりこじつけて）患者さんのためになっているし等々、変化を嫌う現場の雰囲気のことです。確かにこれでは、実行可能なことだけをやって、小さくまとまってしまい、大きな変革はできないと思います。働き方改革推進のためには、それぞれの固有の組織文化を変える必要もあるのかもしれない。

以上を踏まえて、臨床工学技士の皆さんに期待することが、二つあります。一つは、令和3年9月30日に厚生労働省から発出された「現行制度の下で実施可能な範囲におけるタスク・シフト/シエアの推進について」にあるように、他の職種もそうですが、今まで以上に患者さんと直接関わってください、と言うことです。もちろん、諸々の医療機器の管理は工学技士として、しっかりやっていたりしながら、臨床技士として、臨床をさらに意識して医療現場で患者さんと接して欲しいと思います。これは、所属する医療チームが増えることに繋がりますし、臨床工学技士としての矜持を組織内に示す事にもなると思います。二つ目は、医療のデジタル化（医療DX）の推進に一役買って欲しい、と言うことです。現在進行中の働き方改革のかけ声のもと行われる職場ぐるみの生産性向上の取り組みには、医療DXが欠かせません。医療界はデジタル化が最も遅れている分野かもしれませんが、労働時間が限られてくる中、効率性を上げなければ、医療の質・経営の質は維持できません。私が医療に関する職種の中で、デジタル化と最も親和性が高いと考えているのは、臨床工学技士さんです。是非、医療機関全体のデジタル化構想に、積極的に関与していただきたいと熱望します。

この働き方改革を通して、はたらくことの原点を考えてみる、職場の組織文化を意識してみる、そしてこの一連の流れを臨床工学技士としての幅を広げさらに成長するための触媒として活用してください。この行動が各自の医療機関

の成長にもつながり、働きやすい職場づくりへ向かう好循環を生むと確信しています。皆さんの益々のご活躍を期待しています。

(2023年3月27日)